

# 宗教紛争のダイナミカル・システム

## —ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争を例に—

河合裕子

(同志社大学大学院経済学研究科博士課程後期)

### (和文要旨)

ボスニア・ヘルツェゴビナの人々は、セルボ・クロアートという一つの言語を共有する南スラヴ族である。だが彼らは、オーソドックス、カトリック、イスラームという三つの宗教の相異を核として、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人という異なる民族意識を持っていた。

1991年の旧ユーゴスラビア崩壊を契機とし、武力紛争までに至ったボスニア・ヘルツェゴビナ紛争を例に、宗教紛争が何故どのように顕在化・活性化し、潜在化・鎮静化するのかを解析する数理モデルを構築する。

### (SUMMARY)

The peoples in Bosnia and Herzegovina are South Slavs who share one language, Serbo-Croatian. However they have different ethnic consciousness as Serbian, Croatian and Muslim, because of the religious difference between Orthodox, Catholic and Islam.

This paper investigates the case of the conflict in Bosnia and Herzegovina which began after the disintegration of Yugoslavia in 1991 and caused to civil war consequently, so as to build a mathematical model to be able to analyze what mechanism activates or tranquilizes the religious conflicts in general.

---

### 序論

ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の主要な三民族は、セルボ・クロアートという一

つの言語を共有する南スラヴ族であるにも関わらず、オーソドックス、カトリック、イスラームという三つの宗教の相異を核として、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人という異なる民族意識を有し、武力紛争までに至った。この紛争を例に、宗教紛争が何故どのように顕在化・活性化し、潜在化・鎮静化するのかを解析する数理モデルを構築することにより、非常に複雑なボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の本質的理解が可能となる。

## 1. ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争

南スラヴ族の古代、中世および近代の歴史を叙述する中で、セルボ・クロアート語を話す一つの語族が、どのように三つの宗教を核とする民族集団に分裂したのか、キリスト教の東西分裂、またボゴミール派からムスリム人への流れに留意して説明する。その上で近代以前は、オーソドックス、カトリック、イスラームがどのように並存しており、それが世俗的な近代南スラヴ国家の下でどのように持続したかを述べ、旧ユーゴスラビア崩壊以後の紛争を、セルビアあるいはクロアチア民族国家とムスリム共同体への解体として叙述する。

### 1. 1. 旧ユーゴスラビア

旧ユーゴスラビア（以下、旧ユーゴ）は、多民族国家であり「民族のモザイク国家」や「民族のパッチワーク国家」と表現されていた。旧ユーゴの複雑さをあらわす数えことばに「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、そして一つに固く団結した独立への意志を持つ。それがユーゴだ」というのがある。だが実際の旧ユーゴはさらに複雑であった。その状況を以下に挙げる。

- (1) 「七つの国境」とは、旧ユーゴが国境を接していた国の数で、イタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、アルバニアであった。
- (2) 「六つの共和国」とは、旧ユーゴを構成していた共和国の数で、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、セルビア、マケドニアであった。
- (3) 「五つの民族」とは、旧ユーゴを構成していた主要民族の数で、人口比の多い順にセルビア人、クロアチア人、スロベニア人、マケドニア人、モンテネ

グロ人であった。しかし、1971年の国勢調査で新たにムスリム人が民族として認められ、六つとなる。ムスリム人は人口比だと旧ユーゴで三番目に多い民族であった。ここに挙げた以外にも少数派の民族は数多く居住しており、このことだけでも旧ユーゴの複雑な状況が理解できる。

- (4) 「四つの言語」とは、旧ユーゴで使われていた主要言語の数で、使用人口の多い順にセルビア・クロアチア語、ハンガリー語、ルーマニア語、スロベニア語であった。しかし、連邦公用語は正式には三つであり、セルボ・クロアート語、スロベニア語、マケドニア語であった。
- (5) 「三つの宗教」とは、旧ユーゴの主要宗教の数で、オーソドックス（セルビア正教）、カトリック、イスラームの三つであった。
- (6) 「二つの文字」とは、旧ユーゴで使われていた主要な文字の数で、キリル文字とラテン文字であったが、書き記される言語は二つとも同じセルボ・クロアート語であった。
- (7) そして「一つに固く団結した独立への意思」は、旧ユーゴ崩壊の前にすでに空中分解していた<sup>1</sup>。

## 1. 2. 東西分断<sup>2</sup>

多民族国家である旧ユーゴの民族問題をさらに複雑にしたのは、この国があった南スラヴ周辺の地域が、東西分断の歴史を持つことである。旧ユーゴの国土にあたる地域のほぼ中央には、古くから東西の境界線が通っていた。この境界線がセルビアおよびボスニア・ヘルツェゴビナ（以下、ボスニア）と、クロアチアおよびスロベニアの両区域を分断していた。

東西の分断は、古代ローマ帝国に端を発している。ディオクレティアヌス皇帝は、専制君主制の確立を目指し様々な改革を断行したが、その一つが293年の東西分断で、それまで一つであったローマ帝国を二分して二人の正帝を置き、東と西をそれぞれ別々に統治することを定めた。さらに395年には、帝国の東西二分治体制が確立され、東西を分断する境界線が、旧ユーゴのほぼ中央を北から南へ走ることとなった。この東西ローマ分割線による東西分裂が、東の東方正教会文化圏と西のローマ・カトリック文化圏としての相違へと受け継がれていく。後に、ローマ帝国の西

---

1 千田善『ユーゴ紛争 - 他民族・モザイク国家の悲劇』講談社、1993年、148-150頁。

2 旧ユーゴの歴史における事実関係については、主として柴宜之『バルカン史』（山川出版社、1998年）に依拠する。

部が衰退し滅亡していく一方で、東部はビザンツ帝国として君臨し続けた。

中世にこの場所に定住したとされるクロアチア人やスロベニア人の祖先は、フランク王国の影響でカトリックを受け入れ、ラテン文字の文化圏となった。一方、セルビア人の祖先は、ビザンツ帝国の影響でオーソドックスを受け入れ、キリル文字の文化圏となった。

そしてさらに、東西の分断を明確にしたのは、近代における東西分割線であった。これにより、東側はオスマン帝国の領土となり、西側はハプスブルク帝国の領土となった。現在のセルビア、モンテネグロ、ボスニアにあたる東側は、16世紀にオスマン帝国の領土となってから20世紀初めの南スラヴ族独立までのあいだ、その支配を受け続けた。オスマン帝国により、イスラーム文化がこの地域に入ってきたのもちょうどこの時期であった。一方、現在のクロアチアとスロベニアにあたる西側は、以前とほぼ文化の変わらないハプスブルク帝国の支配下にあったため、さらに西欧的な文化へと変化していった。

### 1. 3. 統一国家成立

こうした東西分断による分裂状況の中、新生の「南スラヴ族による統一国家」が誕生する。1918年に樹立された「セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国」は、この地域で最初の統一国家であった。この国家は、南スラヴ族という単一民族に民族自決権が承認されることで初めて築かれた「Nation-State」であるとされ、後に「第一のユーゴ」と呼ばれた。これはかなり強引な民族統一であったが、「第一のユーゴ」は解体まで続いた体制の基礎となる。1929年には「ユーゴスラヴィア王国」へと名称を変更し、第二次世界大戦後の1945年には「ユーゴスラヴィア連邦人民共和国」が成立する。これが旧ユーゴであり、1992年の連邦崩壊まで続いた。

「ユーゴスラヴ」とは、南スラヴの人々という意味で、南スラヴ族の名称が由来である。

南スラヴ地域の各民族は、その歴史が始まって以来、第一次世界大戦終結までの長期にわたり、明確に統合された一つの「民族」を形成したことがなかった。帝国の統治によって支配され続けた結果、文化的にも強い影響を受けた人々は、それぞれが確立された民族になっていた。彼らは、自分たちが単にセルビア人、クロアチア人、スロベニア人であるという意識しか持っていなかった。なぜならば、19世紀に入るまでそれぞれの民族は、互いを知り合う機会がほとんどなかったからである。このような状況下では、民族意識を助長するような相互の密接な接触はあり得ない。

南スラヴ地域の各民族は、次々に代わる支配者の利害の赴くまま、分裂と統合を繰り返させられたが、それぞれが孤立した情報のない環境におかれていた。

ところが、19世紀中頃から、南スラヴ地域においても「民族」に注目が集められ、統一国家形成に向かう動きがでてきた。背景として考えられるのは、この時期、世界各地で民族の独立が掲げられており、南スラヴ地域も少なからずその影響を受けたことである。また、ちょうどこの前後にオスマン帝国やハプスブルク帝国が解体したことも重なり、支配から解き放たれた人々の民族意識は高揚した。そして、1914年に起こった事件が、第一次世界大戦の直接的契機となる。ボスニアの青年が、オーストリア帝位継承者を暗殺した、サラエボ事件である。

#### 1. 4. ムスリム人

ムスリムとは、一般的にイスラームを指しているが、ここでいう「ムスリム人」は、単なるイスラームのことではない。旧ユーゴの「ムスリム人」も信仰はイスラームであるが、他のイスラームとは違う非常に特殊な存在である。その最大の特徴として彼らは、自らを「ムスリム人」という一つの民族であると主張する。イスラームとしてではなく、「ムスリム人」として個別の民族性を声高に唱える人々は、世界のイスラームのなかでも、他に例をみない。

「ムスリム人」はボスニアにおいて、その全人口の40%以上を占める最大勢力であった<sup>3</sup>。ローマ帝国統治時代の東西分割線は、現在のボスニアのほぼ中央を通過していた。中世のボスニアには、キリスト教のオーソドックスとカトリック、そしてその両者から異端とされたボゴミール派が住んでいた。彼らはキリスト教の一派であるが、オーソドックスやカトリックに改宗することは決してなかった。しかし、15世紀から16世紀にボスニアがオスマン帝国の支配下に入ると、ボゴミール派の改宗が始まる。オスマン帝国は、無理な改宗を強要しなかったが、その実利的な理由からイスラームに大量改宗する。ボゴミール派は、オーソドックスやカトリックから異端の扱いを受け迫害された歴史があるため、住民の大半は侵入者を歓迎するかたちとなり<sup>4</sup>、積極的にオスマン帝国側に協力するものもいた。これがボスニアの「ム

<sup>3</sup> ムスリム人44%、セルビア人32%、クロアチア人17%、ユーゴ人6%と続く。ボスニアの民族構成については、柴宜之『ユーゴスラヴィア現代史』（岩波書店、1996年）を参照。

<sup>4</sup> Clissold, Stephen, *A Short History of Yugoslavia: From Early Times to 1966*, Cambridge University Press, 1966. 邦訳は、田中一生・柴宜之・高田敏明訳『ユーゴスラヴィア史 - ケンブリッジ版』恒文社、1980年、74頁。

スリム人」たちの祖先にあたる。

その後、「ムスリム人」は、1967年のチトー大統領による自由化政策により、ボスニアのイスラームとしての民族的特性を承認される。さらに、1971年の国勢調査で正式に民族としての承認を受け、自己申告が可能になった。

もともと「ムスリム人」は、セルビア人やクロアチア人と同じ人種であり、外見も使用言語もほぼ同じである。しかし、彼等とは違う宗教を受け入れ、異なる歴史を歩んだことで、独自の民族意識が生じ、一つの民族として主張をするに至った。

イスラームによる運動は、今でこそ「イスラーム原理主義」といわれ、一般的にも知られるようになった。だが、旧ユーゴにおける「ムスリム人」の主張は、イスラーム原理主義が世界に浸透する以前のもので、歴史上初めてのイスラームによる運動である。これは、イスラーム原理主義の原点といわれるイラン革命が起こる8年も前の出来事であった。

つまり、旧ユーゴにおける「ムスリム人」の運動は、イスラーム原理主義運動とは無関係である。そして、「ムスリム人」は、他のイスラーム世界から影響を受けたものではなく、旧ユーゴの特殊性のなかで生まれた独特な民族だということが理解できる<sup>5</sup>。

## 1. 5 紛争概要

ボスニアは、旧ユーゴの中でも民族の混在がもっとも激しい地域で、「ユーゴスラビアの縮図」とも呼ばれた。しかし、その歴史は争いばかりではなく、民族が混在する地域であるがゆえに、共存して生活していた。二つの大戦期を除けば、殺戮が行われることもなく、必要以上に宗教の違いを意識し、他者を排斥するような動きは見られなかった。どちらかという、宗教の違いより隣人同士としての意識が強いという印象を受ける。その顕著な例が、異民族間の婚姻である。紛争の状況下では想像もつかないが、以前のボスニアでは、異民族間の婚姻も特別なことではなかった。ところが、ある時期を境にして、これまで隣人として平和に生活していた三つの宗教的民族が互いに殺し合い、住居を破壊し合う悲惨な紛争が起こる。

1992年、独立宣言直後のボスニアで、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人の三民族の衝突が起こり、紛争が始まった。三勢力による「民族浄化」<sup>6</sup>を伴う戦いは次第に激しさを増し、時間の経過とともに凄まじいものへと変化していった。「大

<sup>5</sup> 石川純一『宗教世界地図』新潮社、1997年、176頁。

<sup>6</sup> 『ユーゴ紛争 - 他民族・モザイク国家の悲劇』17頁。

セルビア主義」や「大クロアチア主義」などの偏った民族主義もあらわれた。ボスニアのセルビア人は、旧ユーゴ連邦軍を引き継いだ新ユーゴのセルビア共和国から支援を受け、優勢に紛争を進めることとなる。これに対抗するためか、それぞれの民族と宗教的に関係が深い他国からの支援が相次いで行われるようになり、紛争の規模が拡大していった。

ボスニア紛争では、セルビア人武装勢力の民族浄化作戦に対する国際的な非難が集中した。セルビア人武装勢力は、ムスリム人が多い町や村を襲撃し、住民を追い出し、あるいは強制収容所に収容したともいわれている。各地で集団虐殺、集団暴行が上からの命令によって行われた。この命令には、男性は敵の人数を減らすためにも殺してしまうべきだが、女性にはセルビア人の血が入った子供を妊娠させ子供を産ませる、という明確な意図があった。しかし、セルビア人側が一方向的に悪いわけではない。同様の残虐な行為がクロアチア人側やムスリム人側にも見られたという。

ボスニア紛争は、三勢力がそれぞれ自民族の主張ために争うことから始まった。しかし、これだけ拡大してしまった紛争の結果に出た死者は、旧ユーゴ内戦の一つという小さな地域で起こった小規模なものであるにもかかわらず、20万人以上であった。これは、二つの世界大戦を除くと、過去最大の犠牲者数<sup>7</sup>である。また、住居を失ったり、土地を追われたりしたため難民となった人々は、200万人以上にも及んだ。これは、ボスニアの人口の半数近くであった。

ボスニア紛争は、約42ヶ月間続いたが、1995年末にセルビア人、クロアチア人、ムスリム人の各首脳により、米国 Daytonでの和平協定調印をもって終結した。この和平協定の主要点は、①ボスニアを単一の国家とする、②ムスリム人・クロアチア人側の支配地域を51%、セルビア人側を49%にする、③NATOの平和実施部隊6万人が合意実施を監視する、という三つであった<sup>8</sup>。

## 2 宗教紛争の基軸

本論において「宗教紛争」とは、経済紛争や独立紛争を含むあらゆる紛争のうち、特に宗教に起因する紛争のすべてを指している。定義を宗教対立に限らず、あえて

---

7 『ユーゴ紛争 - 他民族・モザイク国家の悲劇』、16頁。

8 Dayton協定に関しては、千田善『ユーゴ紛争はなぜ長期化したか - 悲劇を大きくさせた欧米諸国の責任 - 』（頸草書房、1999年）を参照。

宗教に起因する紛争として範囲を広げた理由は、宗教問題ではなく政治や経済問題が大きく表面化する事例が少なくないからだ。ボスニア紛争もその一つである。

宗教紛争は、二つの基軸で考えることができる。紛争は、同一と差異の関係性により引き起こされる問題である。ここでいう「同一」と「差異」とは、自己との同一性を重視する立場か、他者との差異性を強調する立場かである。宗教においては、伝統および近代との関係性が根本的に重要となる。ここでいう「伝統」と「近代」とは、単に時間軸としてではなく、伝統的な宗教性や祈りなどを重視する立場か、民族や国家など近代的な概念と関連させる立場かである。

### 2. 1 二つの対立軸

宗教紛争は、紛争という現象である限り同一と差異の対立軸を持ち、宗教に関わる問題である限り伝統と近代の対立軸を持つ。その上で、X軸を同一（正）と差異（負）の対立軸、Y軸を伝統（正）と近代（負）の対立軸と置く。

この二つの対立軸の関係性をあらわす図は、以下のものである（図1）。

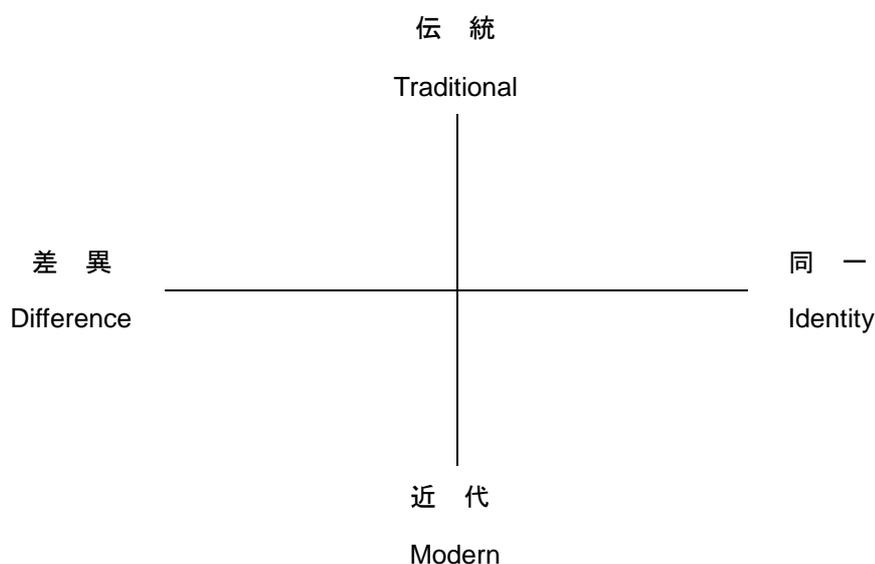


図1

### 2. 2 四つの基本概念図

前節であらわした図1の四つの部分に当てはまる概念は、どのようなものであるか考える。

第1象限は、伝統的であり、かつ同一性を重視するものであるから、宗教的共同

体である。宗教は伝統と深い関わりがあり、その同一の信仰をもってひとつの共同体となり得る。

第2象限は、伝統的であり、かつ差異性を重視するものであるから、三教並存体制である。ミット制の様に伝統的な宗教性を根底に置きながらその差異を尊重する立場である。

第3象限は、近代的であり、かつ差異性を重視するものであるから、民族国家体制である。民族は近代と深い関わりがあり、またそれぞれの差異を強調した単一国家を目指す。

第4象限は、近代的であり、かつ同一性を重視するものであるから、連邦国家体制である。連邦国家は近代的な概念であり、その差異ではなく同一の理念を強調する立場である。

これらの概念をあらわす図は、以下のものである（図2）。

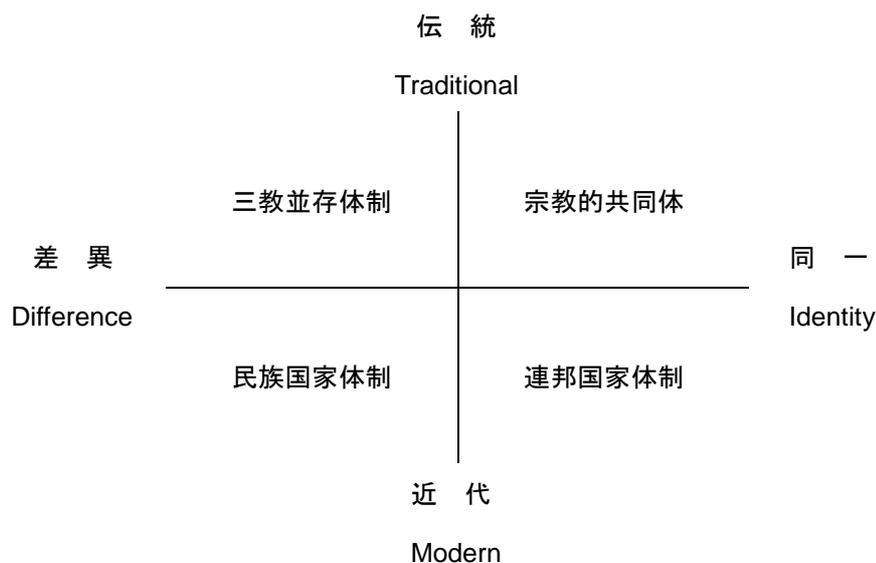


図2

### 2. 3 ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の概念図

次に、図2であらわした四つの概念を、実際に起こったボスニア紛争の事例に当てはめて考えると、

第1象限 宗教的共同体（伝統的同一性）ムスリム共同体の自立

第2象限 三教並存体制（伝統的差異性）たとえばオスマン帝国のミット制

第3象限 民族国家体制（近代的差異性）セルビアあるいはクロアチア民族国家

第4象限 連邦国家体制（近代的同一性）南スラヴ連邦の維持

として位置付けられる。

これらの事例を図にあらわすと、以下の図3になる。

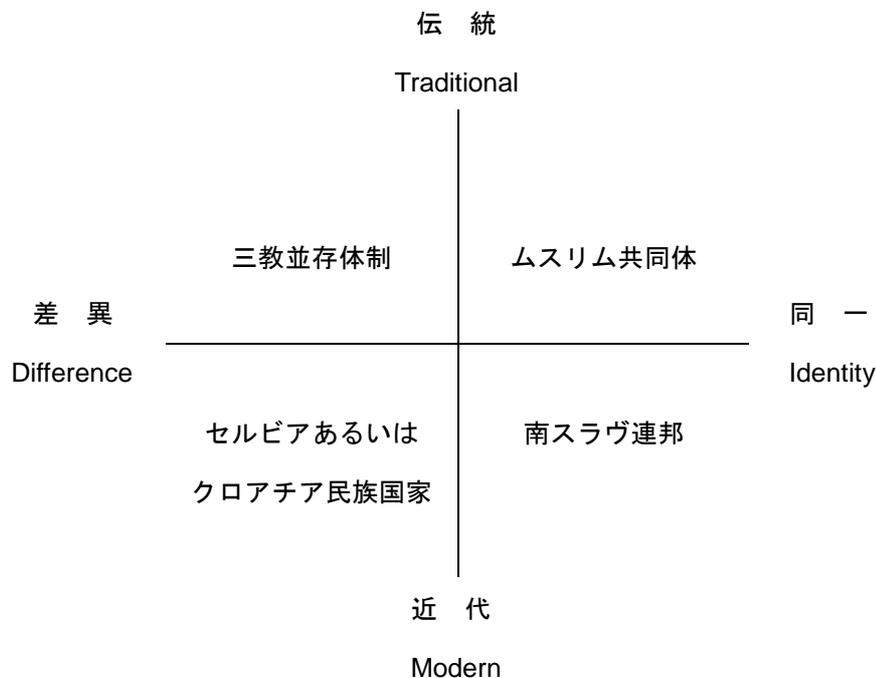


図3

### 3 ダイナミカル・システム

宗教紛争は、紛争に本質的な同一性と差異性の対立軸と、宗教に本質的な伝統と近代の対立軸の直交する平面において展開されるのであるから、それが顕在化・活性化あるいは潜在化・鎮静化するメカニズムは、同一性（差異性）の変化および伝統（近代）の変化のメカニズムに帰着する。

いま同一性（差異性）の変化  $dx/dt$  は伝統（近代） $Y$  に、伝統（近代）の変化  $dy/dt$  は同一性（差異性） $X$  に、それぞれ依存するモデルを考えれば、宗教紛争は以下のダイナミカル・システムとして表現される。

$$dx/dt=Y$$

$$dy/dt=X$$

このシステムを解析すると鞍点解が得られる。  
 このことを図示すると、以下のごとくである (図4)。

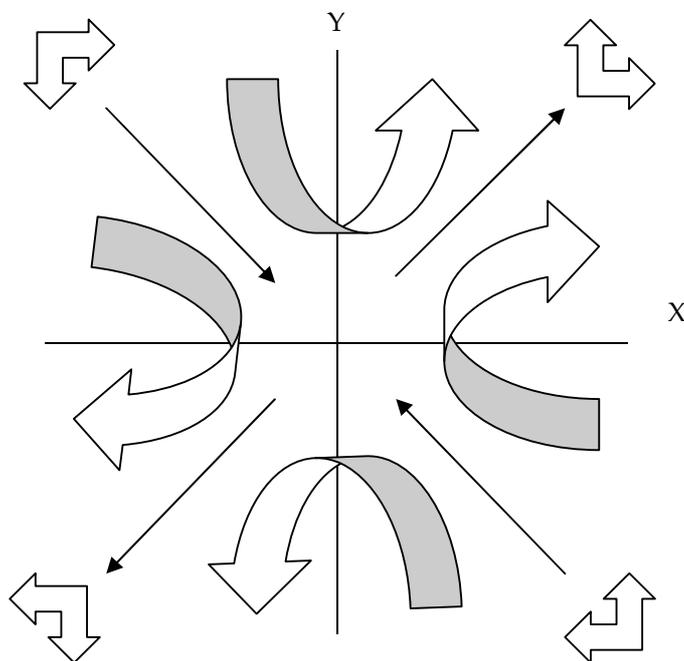


図4

図4は、鞍点解の図であり、その性質からわかることは、第1象限と第3象限において、その動きが「発散」していく方向にあることだ。また、第2象限と第4象限においては、逆にその動きが「収束」していく方向にある。

さらに、座標軸が交わる中心は「鞍点」で、第2象限と第4象限のように矢印が収束する方向にあるときの収束軌道は不安定であり、第1象限や第3象限のように矢印が発散する方向にある発散軌道はむしろ安定である。

#### 4 ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の数理モデル

では、第2章で提示したボスニア・ヘルツェゴビナの概念図 (図3) と第3章で提示したダイナミカル・システム (図4) を重ねて考えると図5のようになる。

「ムスリム共同体」を置いた第1象限での動きは、安定的に発散していく傾向にある。「三教並存体制」を置いた第2象限での動きは、収束していく傾向にあるが、不安定である。「セルビアあるいはクロアチア民族国家」を置いた第3象限での動きは、安定的に発散していく傾向にある。「南スラヴ連邦」を置いた第4象限での

動きは、収束していく傾向にあるが、不安定である。

この矢印であらわした動きの流れから理解できることは、安定的に収束することが非常に困難だということである。いま仮に、第4象限のある位置から、鞍点に向かって変化している動きがあると仮定すると、この動きは、最初の段階ではバランスの良い座標をとり、中心の収束点へと順調に向かう。しかし、ここで何らかの力や要素が加えられ座標のバランスが崩れだすと、瞬く間に収束点へ進む動きから外れる事態が起こる。ひとたび外れてしまった動きは、第1象限や第3象限に流れ出て行き、発散する方向へと向かってしまうのである。

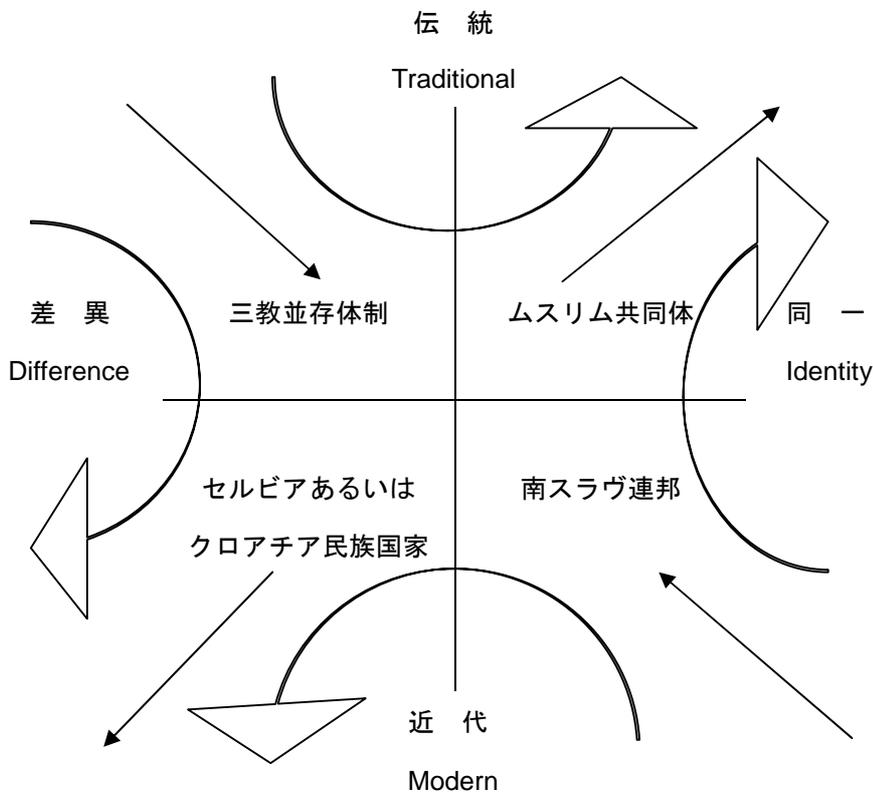


図5

つまり、第2象限の「三教並存体制」と第4象限の「南スラヴ連邦」は鞍点へ収束しようとする動きを示す。これらは、非常にデリケートな均衡である。それゆえ、現実の社会は、第1象限の「ムスリム共同体」や第3象限の「セルビアあるいはクロアチア民族国家」に陥りやすく、発散する状態になりやすいことがわかる。

旧ユーゴスラビアは、1918年の成立以来1992年の解体に至るまで、多民族国家としての安定を何とか保ってきた。しかし、この安定は非常にデリケートなもので

あり、その内情は崩壊や紛争の可能性を多く含んでいた。旧ユーゴという名の南スラヴ連邦は、体制自体が強引なものであり、この統合には人々にその意識を植え付けられる程の大きな力がなかった。人々のなかに旧ユーゴの一員としての国民的な意識は形成されかけたが、それは時間とともに薄れていき、次第に意味のないものとなってしまった。そして共和国の独立問題をきっかけに、均衡は急速に崩れていった。

均衡が崩れだすと、その動きは第4象限の南スラヴ連邦から、第1象限の「ムスリム共同体」と第3象限の「セルビアあるいはクロアチア民族国家」の方向に流れ出す。矢印を見ると分かるように、南スラヴ連邦として統合されていた人々はそれぞれムスリム人、セルビア人、クロアチア人として、各体制を目指す集団に分かれてしまった。そして、発散していく動きにあらわされるように、それぞれの別の方向へと分散し、三民族による三つ巴の争いが繰り広げられた。

ボスニアは、三民族にとって宗教的に重要な場所であった。また、それ以外にも多くの利点が考えられ、旧ユーゴ内でも特別な地域であったといえる。

ムスリム人の目的は、ムスリム国家を形成することではない。彼らの目指すものは、周囲から迫害を受けず他者に脅かされることのない安定した生活であった。ムスリム人にとってボスニアは、ムスリムが最大勢力であるただ一つの場所であった。彼らにとってボスニアが他民族の支配地域になってしまうことは、死活問題なのである。ムスリム人が、旧ユーゴ内のあらゆる共和国内において常に差別され、迫害されてきたことが痛感できる。

セルビア人の目的は、その権力であった。彼らは、その権力保持と領土拡大のために、軍事的なものが集まるボスニアをどうしても手に入れたかった。ボスニアでの権力保持および領土拡大は、実質的に彼らの優遇や経済的な豊かさにつながり、同時にセルビア共和国のそれにもつながるからである。事実、旧ユーゴ内の各共和国は次々に独立したが、セルビア共和国は、新ユーゴスラヴィアの最大勢力として留まり、最後まで連邦権力の保持にこだわった。

クロアチア人の目的は、ボスニア内での自民族保護と、その土地的な魅力のため、一歩も引くことができなかった。また、クロアチア共和国の独立も背景として考えられる。クロアチア共和国は、スロベニア共和国に続き独立するが、その目的の一つは経済的なものであった。クロアチア共和国は、旧ユーゴ内ではかなり豊かな国であり、貧しい他の共和国と一緒に連邦であることで、その豊かさを完全に独占することができないと常に不満を感じていたのである。

最後に、三教並存体制について考えたい。オスマン帝国のミット制に端を発するこの体制は、ボスニアの人々の中に少なからず根付いている。特にボスニアのムスリム人は、宗教的にとても寛容である。ボスニア紛争が勃発するまで彼らは、平和な共存を何とか保とうとしていた。宗教の相違を互いに認め合い、平和に共存していた時期もあった。しかし、長い歴史のあいだに何度となく争いは繰り返された。

## 結 論

以上のように、宗教紛争を解析する数理モデルを構築することで、ボスニア紛争のように複雑な宗教紛争の本質的理解が可能となった。三教並存体制及び南スラヴ連邦の軌道は不安定であり収束しないこと、ムスリム共同体とセルビアあるいはクロアチア民族国家に解体し発散する軌道が蓋然的であることが分かる。したがって、本論のダイナミカル・システムは、ボスニア紛争の数理モデルとして適切である。この例から一般的な宗教紛争の数理モデルを構築する可能性が開示される。

現在、ボスニアのムスリム人は、「ボスニア人」としてのアイデンティティを確立しつつある。また、ボスニアの国内情勢は、少しずつだが回復へと向かっている。それは、限りなく不安定な収束であるが、残虐な殺戮が二度と起こらないようお願いしたい。

## 謝 辞

駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使館のミトハト・パシッチ参事官には、公務で大変お忙しい時間を割いて、快くインタビューに応じていただき、貴重なお話を伺うことができた。

同志社大学の落合仁司教授には、日々の研究にきめ細かなご指導を頂き、また拙論の校閲を賜わった。

ここに心から感謝を申し上げたい。

キーワード：

宗教、紛争、ダイナミカル・システム、ボスニア・ヘルツェゴビナ

**KEYWORDS:**

Religion, conflict, Dynamical System, Bosnia and Herzegovina